

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年十二月廿日印刷（本）昭和十七年一月一日發行

第八卷 第一號

海王

新年號



陸海軍
病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御參加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村 辨康 著

新刊

日常勤行式講讃

B 6 版二百四十頁
價一圓五十錢
送料十錢

！來出よいよい書の望待
侶伴好養修の携必徒宗土淨

◇本誌に連載し、好評を博した信仰の入門書！◇
◇座右に備へて日常勤行の深意を味得せられよ！◇

淨土宗でいつもお勤めしてゐるお經文に一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯をあげ、それに字解までつけて誰にでも解るやうにして、更に著者の燃ゆる信念から湧き出た解説がついてゐます。従つて單なる解説ではなくて誰にも喜ばれる信仰の入門書です。會員各位の修養に、僧侶各位の參考資料と説教その他の教材に最適です。

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

浄土新年號目次

表

紙

中島

保

扉・目次カット

鈴木金平

新春
所感

無駄なき奉公

里見達雄(六)

冬

日

諦

悟

吉田絃二郎(二〇)

先師を
語る

渡邊海旭先生

増谷文雄(二四)

實話

車中の傷痕軍人

安井大學(二四)

續々小庵にて

子母澤寛(四〇)

宣戰布告の大詔を拜して

(九)

實話短篇

ある日の祖父母……ひろみ生(三)

洋行歸り……吉水生(五)

母の訓話……花田順往(三)



童話 勇敢なビボ ー……………小林 一……………(四)

日本 の 民……………岩野喜久代……………(七)
鰻 と 炭……………太田耳動子……………(二)

信 仰 相 談……………中村 辨 康……………(五)

第一回 宗侶 指導者鍊成道場……………(三)

厚生運動 日本古來の遊戲繩跳……………出口林次郎……………(三)

淨土まん畫ぼくのわたしの計畫……………漫 畫 協 團……………(六)

歌 壇……………與謝野 晶子……………(四)
俳 壇……………太田耳動子……………(五)

法説 選んで正しさを攝る 中村 辨 康……………(六)

會のたより……………(五)
編輯後記……………(五)

淨土新年號 目次

廣島文理科大学教授
文學博士

山本幹夫著

新刊

法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛
教を歴史的に解明す。時局下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として
現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。
先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として
佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみなら
ず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではの思は
しめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみた
法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クローズ装箱入
價 二圓二十錢
送料 十錢
會員に限り
送料當方負擔

目次

序論

- 一、法然佛教の前提
- 二、法然佛教の機構

本論

第一編 日本と日本佛教

- 三、神の國と人の國
- 四、神道と佛法
- 五、天照大御神
- 六、祭政・教一如
- 七、國體と國民道德と教學
- 八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

- 九、佛教の公傳以前
- 一〇、佛教公傳紀とその背景
- 一一、日本佛教の發足
- 一二、十七條憲法

日本佛教の原理

- 一三、國家佛教
- 一四、國家佛教の内外
- 一五、平安佛教の歸結

第三編

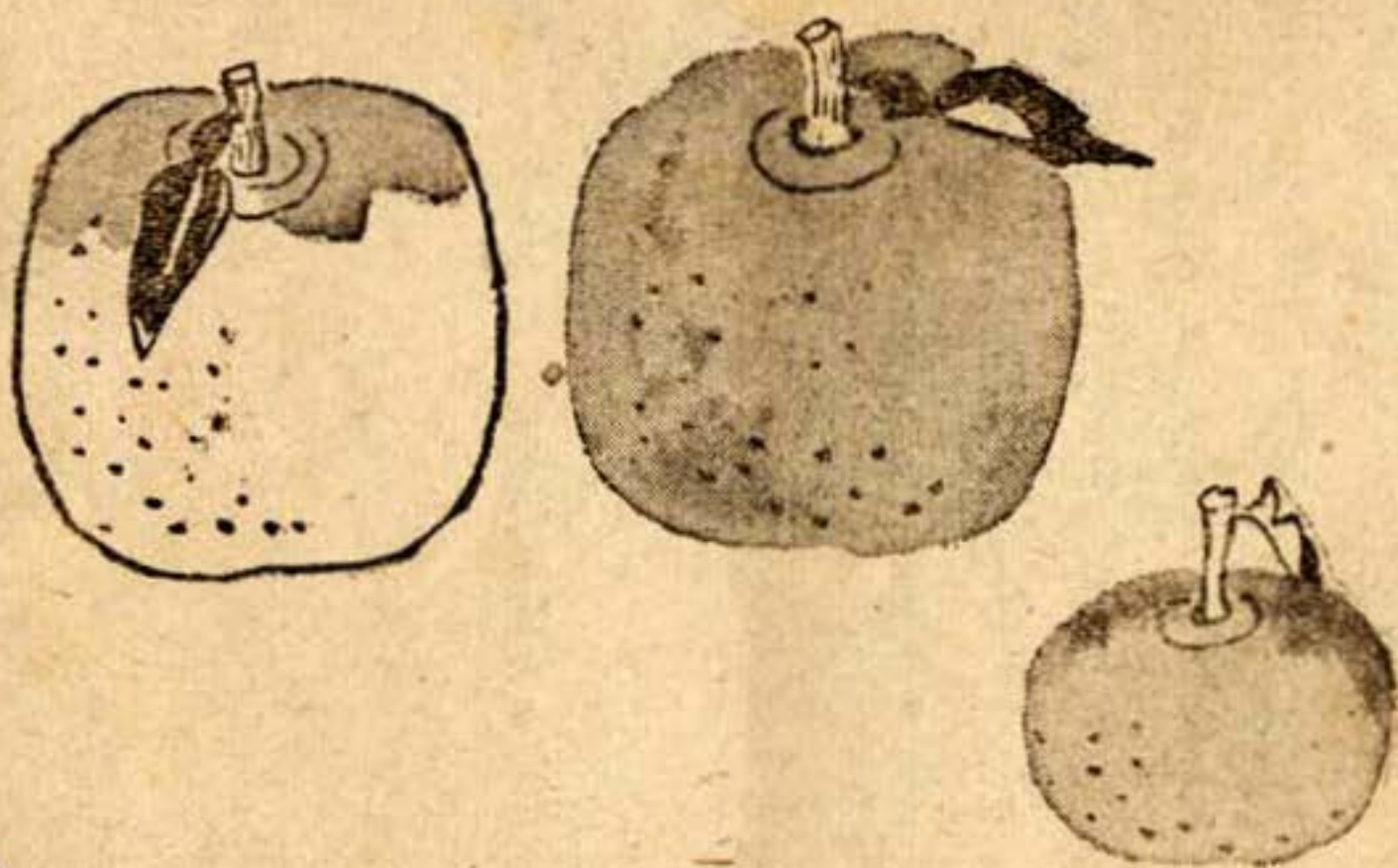
- 一六、法然佛教序觀
- 一七、新宗開創
- 一八、法然上人の宗教體系
- 一九、選擇本願念佛
- 二〇、平等の慈悲
- 二一、萬民翼賛の教法

淨土

新年號

念佛の行は、本より行住坐臥時處
諸縁をえらばず、身口の不淨をも
きはぬ行にて候へば、易行往生
とは申候也。但其中にも、心を
きよくして申をば第一の行と申
候也。

法然上人御法語





所 新
感 春

無駄なき奉公

法然上人讃仰會長

里 見 達 雄

ここに聖戰下五度目の新春を迎へまして、聖壽の萬歳を祝禱し、大陸に大洋に日夜奮戦下さる皇軍將士の武運長久を祈ります。そしてまた會員各位の一億一心の團結をますます固くして、職場職場での御奉公の誠をつくされんことを念じます。

いつも年頭にあたつて私達は希望を新たにし、決心と覺悟を更めて出來得るかぎりお邦のために盡さんものと誓ふのでありますが、今春こそは未だかつてない程に一人強い緊張を憶えます。この氣持を一言にして申すなら、私達に残されてゐる途はただ果斷實行があるばかりであつて、私達の進むべき道はすでに決つて揺がないといふことであります。

言葉を換へて申すなら、從來は牢固たる覺悟のもとに時艱克服をするといふことについてもいろいろと熟慮が拂はれ、その組織なり方法について検討されるといふことが可成り大切なことになつてゐました。ところが今年は議論に力を入れる時節ではありません。お邦のために、聖戰目的を完遂するために、これが少しでもお役に立つと思つたら直ちに率先實行してゆかねばなりません。そしてまた私達の日目の生活に、所謂日常茶飯事と云はれる僅かな事柄について何れに力を入れ、何所に工風を加へたならば少しでもお國のためにお役にたつかを間斷なく考へて暮す心掛けが大切であります。そして良いと思つたことは躊躇なく實行することです。若しそれ實踐力に缺くところがあれ

ば如何なる名案や妙策も三文の價值もない飾りものに過ぎないこととなります。

日本やまの民たみ

岩野喜久代

蛟龍かうりゆうが大わたつみに飛躍ひやくする姿と見ゆれ日本の地圖ちづ
天あまつ神かみひらき給たまひしこの國くにの子孫しそんの力ちからためす日は來きぬ
あなかしと神かみの御裔みえいをいたゞきて死しなんとぞ思おもふその
大おほまへに
大御代おほみよに生うまれ草くさの身み布衣ふいの身みもその志こころざしのべ得うべきか
な

すめろぎの國くにに難たあり今いまぞわが命いのち捧こげむかしとけれど
も
古いにしへも今いまも雄をごころ猛たけくして正ただしきに死しぬ日本男子やまとのこは
死しをおそれ難たに崩くづるるものあらず弱よわき女をんなの端はしと云いへど
も
黒潮くろしほの流ながるるところいざ行ゆかむかつてわれ等の祖おやも越こ
えにき

いまや誰たれでもがもつとお國くにのために盡つくしたいといふ衷情ちゆうじやう
で一杯いっぱいでありませう。臨戰りんせん六年ねんにもなれば物資ぶつしやその他たが
不足ふそくしたり、諸事しよじ疏通そつづうを缺かいてくるのは當然たうぜんであり、かく
てこそ會員各位かいゐんかくゐの職域奉公しよくふこうが大切たいせつになり、一億一心いっくしんの和合わがふ
が重要じやうじやうになるのです。しかしこの際自分さいじぶんだけが努力どりきし、職
場はを守れば宜よろしいと云ふ考かんへ方かたでなく、進すすんで他たの人ひとのた
めにも盡力じんりきしなければなりません。それが自分じぶんだけが特に
努力どりきし苦勞くらうしてゐると誤あやつて思おもふものがあれば、從したがつてそ
の人ひとは他たに對たいしては不親切ふしんせつになり、當然たうぜん人ひとの和わが破やぶれて來き
ます。ほんの一部いっぶの人々ひと々の不親切ふしんせつな所業しよげふのために、多くの
人達ひとたちが何どの位暗くらい氣持きもちにされるかといふことは思おもひ半なかばに
過すぐるものがあるのであつて私達わしたちの日常にちじやうに經驗けいけんしてゐる所
です。

また各方面かくほうめんに段々だんぐと統制とうせいが強化きやうくわされるに従

○

人は先づ足ることを知ることが肝要です。古人の言葉にも「黎羹も膏粱より甘しとし、布袍も狐豹より暖かなりとし、編民も王公に譲らず」とあるやうに、その人の心掛け次第によつては何んな粗食も山海の珍味として味はれ、布子を着ても贅澤な毛皮より暖かであり、身は一介の庶民でありながらも王公にも譲らぬ貴さを持ち得るものであります。斯く足ることを知つて少しでも餘分なものがあれば直ちに不足な方に廻してこそ一億一心の基礎が出来るのであり、底力が湧き出るのであります。

私達の生活の規準は佛教にあります。佛教は申すまでもなく他の宗教のやうに政治外交に大きな權威をふるつたり、權謀術數の外交的手段を弄するものでありません。私達は念佛を申し、少しでもお邦のためになる暮らし方をしたいと精進してゐるのであります。和國の教主聖德太子が日本佛教徒の歩むべき大道としてお示しになつた十七條憲法の中で、「人はなはだ悪きものすくなし、能く教ふれば之に従ふ」と云はれ、それ三寶に歸せずんば何を以つて枉れるを直くせん」と明示せられ、更に「何れの世何れの人かこの法を貫ばざらむ」と仰せられ、私達の生活規準を教

示遊ばされてゐます。

○

また宗祖法然上人のお言葉の中に、お念佛を申すのに、住所にて申されずば流行して申すべし。流行して申されずば、家にゐて申すべし：：」の句がありますが、これ程お念佛を申すための強いお言葉はないと存じます。

私達は宗祖上人のお導きによりお念佛を申すのは勿論ながら更に進んで、お邦のためなら何事によらず事の大小を論ぜず率先躬行すべく努めなくてはなりません。私達の衣食住にもよく反省して何か無駄はないかと考へ、これを排除してゆくことはそれだけでも立派な御奉公です。

物質文明が進めばとかく贅澤になり勝ちで、前の大戦末期の獨國に數十萬の餓死者が出たその中で、上流中流階級のものが多かつたそりですが、これは最低限度の生活に耐へられず敗れ去つた人達であります。

私達は最低限度の生活に精神力と肉體の鍛錬をしてゆきたいものであります。贅澤な暮らしの中から決して力は生れて來ません。簡素な生活の内にとそ私達の底力があるのです。

宣戰布告の大詔を拜して

昭和十六年十二月八日米國と英國との兩國に對して宣戰布告の

大詔が渙發されました。

われわれ一億の國民はこの日のあることに備へて總ゆる方面から萬善の準備を進めて來ました。そして遂に火蓋は切られました。東亞諸民族の福祉と世界平和のために隱忍に隱忍を重ねてきた帝國は、その福祉と平和を破壊せんとして、飽くまで東亞共榮圈の確立を妨害するこれら兩國に對して斷乎膺懲の鐵槌を下すべく起ち上つたのです。一億が一團になつて突進しませう。畏れ多くも宣戰布告の大詔を拜して肉躍り血の湧くの感を禁じ得ません。われわれは黙つて勇躍前進するばかりです。

東亞共榮圈の確立を目指して大陸に着々その歩を進めて以來、英米兩國は聖戰遂行の意義を解せず、まぎれもない現實の事實すら強いて無視せんとするばかりか、更に、反つて一地方軍閥たる重慶政

權を援助



冬

日

諦

悟

吉 田 絃 二 郎

既もう天城あまぎには初雪はつゆきが降ふつたといふたよりがあつた。狩野川かのがはのほとりからはろはろと山の雪ゆきをながめて、天城あまぎを越こゆる伊豆いづの旅たびを思おもひつつわたくしは今日けふも亦終日書齋しつしよさいに閉とぢこもつてゐた。冬ふゆになれば天城あまぎの里さとにはよく猪いのししがで出て來て畑はたけを荒あらしてゐた。獵夫れつふたちは猪いのししを追おふて歩あるいた。撃うつて來た猪いのししの腹はらを裂さいて中なかに雪ゆきを漬つめて、終夜木しうやきからつるして置おくやうなことをしてゐた。道みちで仔猪こじしを擔かついで來る獵夫れつふたちに遭あふと一層そうあはれな氣きがしてならなかつた。

猪いのししは雪ゆきに追おはれて里さとに下おり、畑はたけの作物さくもつを荒あらすので、親おやも仔こも人ひとに撃うたれる。是非ぜひがないといへば是非ぜひがないが、あはれである。

恰度さうど五年前ごねんまへの冬ふゆのことであつた。わたくしと亡なくなつた妻つまは伊豆いづの山やまを歩あるいてゐた。不圖ふとわたくしは獵夫れつふに追おはれた大きな牡鹿おしかに出會であつた。毛けの色いろは黒くろいほどに濃こく、日ひの光ひかりを射いかへすほどに艶つや々してゐた。鹿しかはわたくしたちを見みてきよとんとしてゐたが、やがて木立こだちの中なかへ逃にげて行いつた。妻つまは合掌がっしやうして「何どうぞ殺ころされませんやうにと」鹿しかの後あとを拜たたんでゐたが、後あとになつて村むらの人ひとに聞きいたところでは、幸さいはひに鹿しかは撃うたれなかつたといふことであつた。

人間にんげんのみが生いきてゆく權利けんりを持もつてゐるやうに考かんへてゐる人ひとが多い。この考かんへ方は白人はくじんの間に殊ことに強つよい。したがつて白人種はくじんしゆは白人はくじんのみが生せい存ぞん權けんを持もつてゐるやうに思おもつてゐる場合ばあひが多い。鳥とりも獸けものも生いきて



ゐるために造られたものである。

×

多摩川の田圃にも追々千鳥が鳴くやうになる。多

鰻と炭

太田耳動子

鰻ちりのそいゝろ水蟲うづきくる

鰻ちりの眼が熱れてきてはればたし

鰻酒のこはくに澄むはすてがたし

鰻雑炊見てゐし主手をかせる

鰻くうて舊き廓の街にあり

炭火吹けばいくじがなくて散らばれる

白々としては炭火の消えぬべし

摩のほとりに住むわたくしにとつて、冬の季節が訪れて来る楽しみの一つは朝々に田圃に下り立つ千鳥の群を見、その聲を聴くことである。月の牙え渡る夜、東京から夜更けて家に飯る田圃道に千鳥の聲を聴いて、霜夜の小徑に佇んだことなどを思ひ出す。しかしその千鳥も田圃に埋められてゆくのと空氣銃を持った男たちのために年々すくなくなつてゆく。

昔は武士の心のたしなみの第一としてもものあはれを知ることが説かれてゐた。日本人のすぐれてゐる點、日本人の藝術の秀でた點、日本人のものの考へ方の特異な點も、このもののあはれを知るところから出發してゐた。

×

今は學校の教育もこの日本的なものを忘れて科學一點張りである。科學的なことは誠に結構であるが、魂を忘れた國民生活に墮したとしたら災なるかなである。北條時宗の決斷を生まれましたものは武器の量や兵の數ではなく、たゞ一禪僧の心であつた

ことを考へなければならぬ。相模太郎一人の信念心であつたことを思ふべきである。

×

科學がわたくしたちの生活を支配すれば支配するほど、一層わたくしたちの生活は心によりて支配されなければならぬ。科學の生活は手段である。心の生活は人生の究竟である。人は心の生活のために生き、心の生活のために死なねばならぬ。

進化論の發見者ダアキンが言つたことがある。「わたしは科學にのみ熱中してゐたために音樂を聴く耳を失つてしまつた。若いころから毎日一時間づつでも音樂を聴く習慣を附けてゐたら、わたしの生活はもつと幸福であつたらう」といふやうな意味の言葉であつた。

あの大科學者が音樂を聴く耳を失つたことはダアキンの生活にとつてさびしいことであつたであらう。しかしダアキンに感心させられることはかれが最後まで音樂に對する關心を失はなかつたことである。すなはちかれは最後まで心の生活を忘れなかつ

た。偉大な科學者は偉大な心の生活者でなければならぬ。

×

朝起きて家の周圍を歩いて見ると、昨日の夕方掃いて置いた庭の黒い土の上に錦木や楓の紅葉が落ちてゐる。眞つ黒な土に落ちた紅葉の一つ一つをじつと見つめてゐると、その一つ一つの紅葉が何かをわたくしの心にさゝやく。靜かな悟りだ。

柔かな春の光りにめぐまれて芽生えし、焼くやうな眞夏の光りに繁り、靜かな秋の陽光に愛撫せられてゐた木の葉は初冬の霜に濡れて黒い土の上にやすらかに眠つてゆく。

美しい悟りだ。美しい涅槃だ。

朝ごとに庭の落葉はわたくしの心にさゝやく。死に支度いたせいたせ」といふ言葉は俳人一茶の句であるが、わたくしの庭の落葉も亦わたくしの心に同じ言葉をさゝやく。

あるがまゝに春の光りを浴びて生くることの尊さあるがまゝに秋の光りを浴びて生くることの尊さ



あるがまゝに冬の光りを浴びて眠りゆくことの尊さ。

あるがまゝに冬の光りを浴びて眠りゆくことの尊さ。

×

夕方わたくしは家の周囲を歩いてゐた。

わたくしは不圖庭の隅の竹林の中に巢喰ふ雉子鳩を見た。

わたくしは倉の裏の柚子の木のでつべんに忘れられた數顆の柚子を見出した。柚子は倉の黒い屋根の瓦に反映して黄金のごとく見出された。

わたくしはまた枝頭に取り残された紅葉を見た。

夜の更くるまでわたくしはぼつねんと書齋の椅子に凭りかゝつてゐた。わたくしは今夜も孤獨な自分の影を見守つてゐなければならなかつた。耐へがたいほどの寂しさが犇々と迫つて來た。

しかしわたくしは竹林の中の雉子鳩を思ひ出した。倉の裏の柚子の實や枝頭の紅葉を想ひ出した。

わたくしは明日の朝はやく庭に下りて、竹林の中の雉子鳩を見ようと思つた。

わたくしは朝の庭に立つて柚子の實や枝頭の紅葉

に朝の挨拶を取りかはさうと思つた。

わたくしは孤獨ではない

がたゝと

雨戸を揺つて風が吹いて來た。

わたくしは竹林の雉子鳩の巢を案じた

柚子や枝頭の紅葉を案じた

風よ、しづかに吹け

わたくしは孤獨ではなかつた。

一瀬 直行著

小説集 怒りの町

定價金一圓八十錢

函入美本B六判三百頁

發行所下谷區上野櫻木町二

櫻木書房

飲めば益々

元氣旺盛

無(にんにく粉末)コナワサビ
臭(固形にんにく)そてつ粉末

子供の疳蟲によく

きく孫太郎蟲あります

特約店大募集

静岡市上香谷町

神谷昌孝

電話二八三番

振替東京一四六五一番



いつも可成り混み合つてゐる上野驛ばかりに慣れてゐるので、その日はまた時間のせいか閑散なのがかけつて珍しいものに思はれた。朝早くか、さもなければ夜ばかりに乗りつけてゐる私には、こうした晝間の汽車が何

話 實

車中の傷病軍人

安 井 大 學

んとなくもの足りないやうな所があつて、哀愁めいたものを感じた。急いで馳けつけて來たが、乗つてみると發車までに大部時間があつた。

淨土宗管長であり法然上人講仰會の總裁である郁芳隨圓鏡下が、長野地方の御巡教中に連日の多忙と無理とがさわつてか、急に病床につかれたとの通知を受け取つたので、早速宗務所からお見舞ひに私がこうして發つことになつたのである。

「零時三十分發、長岡柏崎行き列車は……」と改札口の方から擴聲器の聲が聞えてきた。ホームは發車を知らせるベルが鳴つてゐた。丁度その時、そゝくさと私の乗つてゐた

同じ車に乗り込んで來た人があつた。その人は一目で判る白衣の勇士であつた。私はこの傷病兵に軽く會釋して、私の前の空席を「何うぞ」とすゝめた。彼が松葉杖を持つてゐたので脚の負傷であることは判つたが、しかし私の前で席に座る様子からして、彼の片脚は殆んど腿のあたりから切斷せられ、その代りにつけてある義足にも未だ十分慣れてゐないらしいことが判つて驚いた。

私は彼と雑談を始めた。彼は快活な口調で私の話相手になつてくれた。その内に彼は何も煙草が欲しくなつたらしい。彼は餘程急いで來たとみえ煙草をきらしてゐるのが判つた。しかし私は煙草を喫まないもので、もとよ

り持つてゐるはずもない。さて氣の毒にと思つてゐると、私達の傍の席にゐた一人の青年

か彼の様子をみてやがて彼に向つて無難作に「如何ですか！」と煙草をすゝめた。その態度がまるで十年の知己であるかのやうに自然であつた。私はこの青年の素直な、少しもこだはらぬ態度に好感を憶へた。

すると今度は、私達の右の方に座つてゐた二人の婦人連れが、辨當を出して彼に「失禮ですけれど召し上つて下さい」と差出した。多分汽車に乗る前に驛で買つた辨當であらう、これをすゝめられた彼は別に固辭することもなく喜んで受取つた。

これは丁度同じ車に乗り合はせた者達が、皆傷痍軍人の彼を圍んで、心から少しでも慰

めようとする氣持の現れである。私はこうした人々の性根に接してすつかり朗らかになつ



が感じられた。

二

私は勢ひづいて彼と色々のことを話し始めた。話題は、自づと戦場のことに移つて行つた。そして彼が北支方面で實に華々しい戦歴を持つ勇士であることが判つた。やがて彼は懷中から一枚の寫眞を出して私にみせてくれた。その寫眞には、彼の軍服姿が、颯爽として實に堂々たる彼が乗馬姿でうつされてゐた。

「この寫眞が私の脚の最後の姿です……」と彼は口もとに微笑を浮かべながら、その寫眞を説明してくれた。

「今年の八月のことでした。或る作戦が始つて、私たちはグン／＼敵を追ひまくつてゐたのです。私は馬の上なのでそれ程には暑さにまけません。私の乗

全身から汗が流れ落ちてゐました。肩のあたりが汗の鹽氣で白くなつてゐるのが、私の目に強く映りました。

連日の強行軍で可成り疲れてゐたに違ひありません。普段は健脚を自慢してゐた私の馬ですが、少し走るとすぐ呼吸が迫つて來ます。私は乗つてゐながら馬の呼吸にばかり氣にしておりました。きつと呼吸が百を超へてゐたのに違ひありません。

こうして行軍を續けてゐると、突然私の脚に強い衝撃を感じました。まるで火の玉をつけられたやうに思ひました。敵の一彈が私の脚と私の馬の腹を貫いたのです。私と馬とはそのまゝドット倒れて、私は氣を失ひました。私達は大きな池のやうな水溜りの中に倒れたのです。

ところが何うでせう。私の馬はスグにはねおきました。そして自分の傷の痛みをこらへながら、私の身體を口に銜へて水の中から私を救つてくれました。そこから二十米も離れた所まで私を連れだし、馬は可愛さうにそ

こでついに息がたえてしまひました。

後になつて私が戦友に收容され、私の側に



人馬の死

ばかりの「朝日」を手にして「差し上げませう」と彼に與へた。こうして車の中は再び明るい空氣にもどつて行つた。

彼は新しい義足に慣れてゐないために座席に長く腰かけてゐるのが苦しいと見へて、ときどき立つて脚をさすつてゐた。

三

丁度、汽車が高崎を發車して間もなく、彼は顔をかゞやかしながら席にもどつて來た。そしていきなり私にこう云つた。

「今えらい人に逢ひましたヨ。」と未だ興奮からさめぬかのやうに、前置きしてから語り續けた。「いまデツキの所で、見知らぬ人から突然私の負傷した場所や月日を尋ねられました。そしてその人の云ふには丁度同じ場所

で同じ日にその人の弟さんが戦死したとのことなのです。私も驚きました。その人の弟といふのは私の戦友で、しかも同じ場所と同じ日に私と同様敵弾にやられ、その戦友は不幸そのまゝ戦死なされたのです。私はかねてから戦友の遺族を訪問したいと思つてゐましたが、何しろ私は陸軍病院に入院中ですし、またその餘裕もありませんでした。しかも今日の私の旅行は、私の父が中風で永い病床にある上に、母が危篤との電報を受け取つたので、急ぎ家に歸る途中です。だから遺族の方と一緒に車を降りるわけにはゆきません。でも停車の僅かな時間でしたが、戦友の戦死の情況や、戦友の普段元氣のよかつたこと等を話してやりました。その方とても喜んでくれました。私も實際嬉しかつたです。……なるほど、こんな奇縁もあるものかと感じ入つた。奇縁といふものは不思議なものである。

「きつと戦友が私と遺族とをここで引き合せてたのかも知れません。」と彼も亦不思議でたま

らぬといふふうであつた。

四

汽車はやがて小諸を過ぎた。そこから二人連れの青年が乗車して來た。温泉にでもゆくのであらうか、何處で飲んだかもう酒に酔つてゐた。同車してゐる傷痍軍人をみても禮一つしなかつた。それまでは乗り降りする乗客は勿論のこと、幾度となく往復する車掌や給仕までが彼の前を通る際には必ずきちんと一禮してゆくのに、新しい乗客二人は知らぬ顔をしてゐた。

それだけならまだよいが、彼等の行儀の悪いのにしまひに私は不快を感じた位であつた。片足を窓ぎはにのせて林檎をかじり始めた。そして云ふことがまた嫌味であつた。例へば、「俺達はあるだ、金を儲けるつもりはないのだが、自然とたまるのだから仕方がないや。」と云ふ。萬事がこれしきで、全く聞いてゐられなかつた。折角朗らかな車内が、二人の新客のために目茶苦茶にされてしまつ

た。従つて私達の話も途絶えがちで黙つてしまつた

のホームも眞暗であつた。車から降りた私達は大した荷物があるわけではなかつたが、混雑する人にもまれて歩くにも容易でなかつた。しかし彼はほんとに元氣に

トントンと高い金屬性の音を響かせながら階段を登つて行つた。私はみてゐてハラ／＼したが當人は至つて平氣であつた。彼の生れた土地に歸つたのである。彼の母は或ひは危篤かも知れないが、恐らくはまだ息があるだらう。彼としては嬉しくない筈はなかつた。

驛の外も可成りの混雑であつた。闇の中をすかして私は彼の出迎ひ人があるのではないかと、さつきから注意してゐたがそれらしい人影は一つも見出せなかつた。彼が出征の時には、この驛で多数の見送りを受けて出發したに違ひない。その同じ長野の驛で今こうして自分の生家に馳けつけた彼に一人の出迎ひもないことが、私にとって實



厚生
運動

日本古來の遊戯繩跳

家庭に工場に學校に

厚生省體鍊課

出口 林 次 郎

國防の萬全に

體育も長期對策

昔から大和民族は、智仁勇の三美德を兼備する國民性を中外に誇つてきたが、その美しい國民性は、その天性に加へるに、平素に於ける肉體と精神の鍛錬によつて育成されたものである。

『艱難汝を玉にす』鍛錬なくして、體力向上も銃後國防の萬全もない。

時艱に處して、毅然として動ざること山の如く、自若たる構へで正義の大道を踏み、眞に長期建設への歩調をとり得る者は、ひとり

鍛錬された人のみである。『心身の虚弱なものを鍛へ、健康に溢れ生産力に満ち／＼た國民を創れ』と叫んだ盟邦ドイツ國の今日の隆盛が如實に物語つてゐる。

日本は今、片手で銃を執り、片手で鋸を握つてゐる。渺茫たる大陸の彼方に、古き支那を驅逐する砲聲が薄れて行くと、そこには新しい支那の土を耕し平和の芽を播く鐵鋸と、建設のハンマーの響きが聞える。日本は今、一方で戦ひ、一方で建設してゐるのである。

この難事業を貫徹せんには、今後、我等國民の負擔は益々増大し、莫大なる犠牲と異常

固なスクラムを組んで、困苦缺乏に耐へ、聖戰貫徹と、長期建設の達成に一路邁進すべき秋である。

併し、その前途たるや塞に遠遠である。今後何十年を要するかの豫想すら許さない建設の爲の忍苦の生活に、我等は果して堪へて行けるであらうか。長期の犠牲には、それに對應する長期對策がなければならぬ。長期間に亙る心身の緊張は、到底持續し得



とりが興へられなければならぬ。これ、銃後

に厚生運動の必要なる所以である。

餘暇を利用す

厚生運動の提唱

厚生運動は、積極的には國民に餘暇の善用により健全なる娛樂を興へ健康を増進し、消極的には生活疲弊者の慰安を圖り、國民生活を刷新し、國民の活動要素を培養する事を目的とするものである。近代社會の複雑化は、國民の日常生活を機械化し、人間は機械の支配者としてよりは寧ろ機械の手足となつて日夜働くのに忙しく、適度の運動によつて心身を鍛磨する事を忘れてゐる。長期建設の時代に入つて勞働力が益々要求され、心身を鍛へる機會は失はれて行くであらう。國民體力低下の點からも之は誠に憂ふべき事である。厚生運動は、彼等に餘暇の正し

き利用を教へる。又大衆の間には、休養と娛樂、享樂を同一視して、休養の爲に興へられた時間を不健全な娛樂に、非衛生的な享樂に耽つて心身の消耗を招いてゐる者が多い。厚生運動は、彼等に正しい休養法を教へる。

非常時局下厚生運動の提唱によつて各種のスポーツや體育運動が奨励され出したが、かゝる運動休養の合理的實行は、實際に於ては非常に困難な事であり、興味の伴はぬ運動競技の如きは仲々實行されないし、興味が有り過ぎて娛樂本位に墮せば、度を過して過勞を來し、生活を不規則に、放肆する。

人生飛躍の

繩跳こそ理想的

繩跳は、場所を選ばず、時間をきらはず、老若男女の何れを問はず、極めて平易にやれて、しかも準備が簡單であるといふ事と、その體育的效果が非常に大きい事から、日常保健運動として國民の心身鍛錬に極めて効果的な

重要である。

次にその運動が年齢や性別に關係なく、何時何處でも簡単にやれるものである事が必要である。

個人で團體で

跳べよ 鍛へよ！

國民が、仕事の餘暇を利用して、簡易に行つて體力を鍛磨し楽しい休養をとる事の出来る大衆スポーツとして、繩跳こそは理想的のものである。

從來のスポーツには熟練や特殊の技能が必要であり、色々の準備行動が必要であるから、本當に大衆化するには多少の困難が伴ふが、繩跳は、經費もかゝらず、技術も必要とせず、極めて簡単に行はれる大衆性を豊かに備へてゐる。

跳べよ！ 鍛へよ！

繩跳こそは、國民精神總動員下に於ける最も適切な國民スポーツである。

飛



先師を語る — 9 —

渡邊海旭先生

増谷文雄

—

正月ともなる

と、私はいつも、

昭和八年の元旦

の悲壯にもまた

感銘ふかい光景

を思ひ出さず

はをられませ

ん。それは私の生涯において最も偉大なる行爲に接した瞬間であり

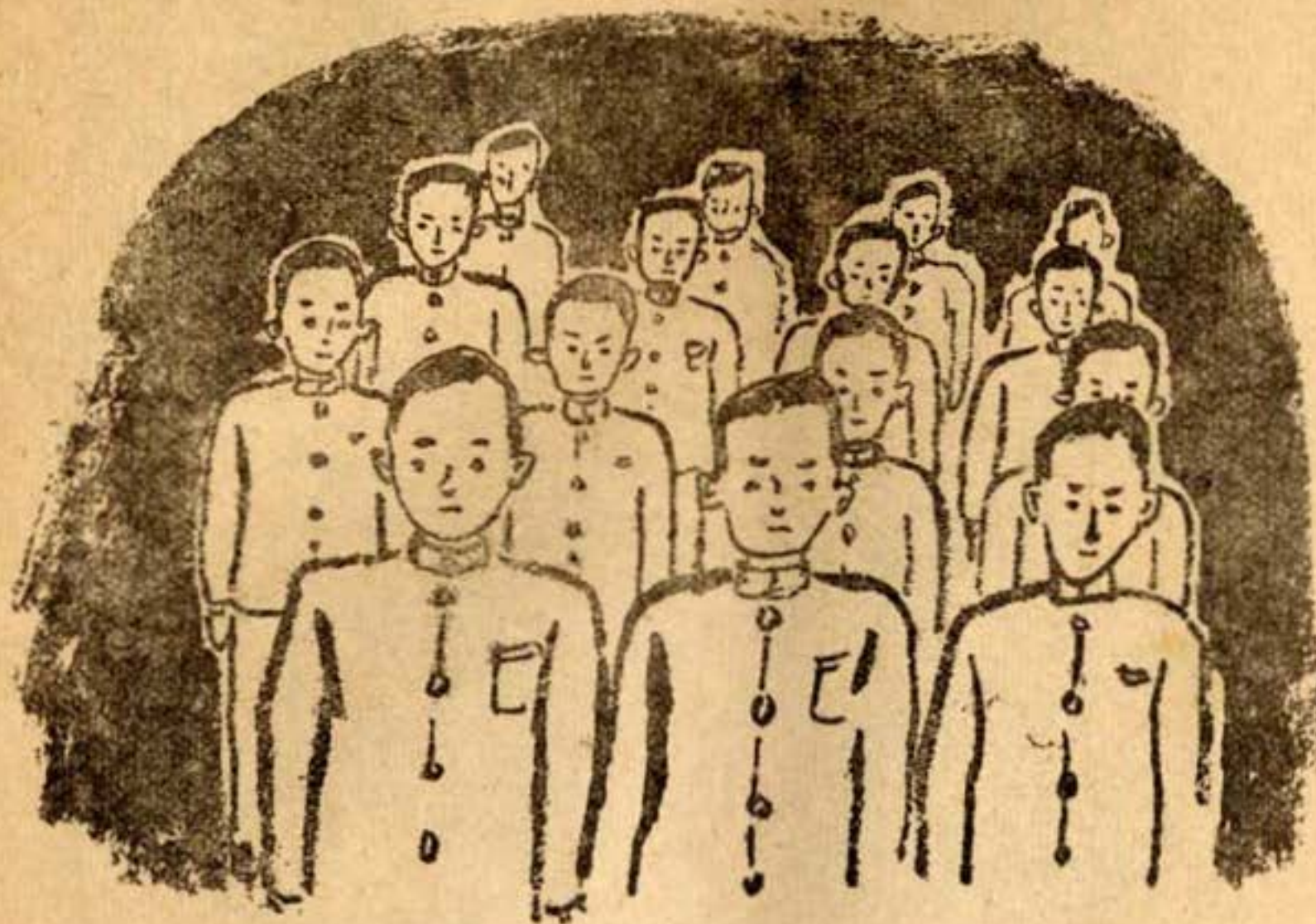
ました。

わたくしはまだ言及せずにをりましたが、渡邊先生は獨逸から歸られてから間もなく、淨土宗立芝中學校に校長となられ、爾後その

死にいたるまで二十數年にわたつてその職にをられました。その間には先生は實にすばらしい教育者としての一面を發揮せられたものでありました。東京にをられる方は知つてのことでありませうが、芝中學校といふと、現在でも、數多い東京の私立學校の中にあつて、巍然として頭角をぬきんでてをるのでありますが、この學校をこれまでのものに仕上げたのは、一つにかゝつて渡邊先生の教育者としての天稟によるものであつたと信ぜられます。

實はわたくしも、帝大を卒業するとすぐこの學校に奉職して、渡邊先生のもとで教員として働くこと八年餘に及びました。その私が言つては可笑しいかも知れ

わたくしがこの學校に在職中、直接わたくしの眼をもつて見、わたくしの心をもつて感じとつた渡邊先生の人格の不思議もまた、あげて數へるこ
とが出来ない
ほどで
ありま
した。
先生は
決して
生徒を
叱るや
うなこ
とはし
なかつ
た。し
かも生
徒たち
は、先
生のあ



の大きな眼の中に憂ひの影のやどるのを見ると、どんなに騒いでゐても忽ちシーンと静まり返るのでありました。先生がああ講堂の壇上に立つて、訥々として訓されると、どんな生徒でもが何物かにうたれたやうに、忽ち生きかへつたやうに緊張したものでありました。渡邊先生にとつては、生徒たちは本當にいい子子供たちであり、生徒たちにとつては、渡邊先生はまつたくその慈父でありました。

その先生が、昭和七年の暮から、悪性の風邪とリウマチスとで病床につかれたと聞いた時には、教員も生徒もこそつて、慈父の病を案ずると全くおなじやうに、先生の病状をお案じ申してをりました。が、明けて昭和八年の新年の大儀には、燕尾服の正装に威儀をたゞした先生のすがたを講堂の壇上に仰ぐことが出来ました。

わたくしどもは皆、よかつたと思つた。年末のいそがしさに、お見舞もせずにあつたのだが、先生の御病氣はもうよくなつたのかとホツと思つたことでした。だが、實はさうではなかつたのです。

壇上に立つた渡邊先生の顔色は土のごとくでありました。勅語を奉讀し、新正の訓示をたれる先生の聲には、いつものやうな潑刺たる生氣が失せてゐました。生徒が年のはじめの唱歌をうたふ頃には、先生はすでに壇上に立つてゐることに堪えざるもののごとく、そつと卓子の角につかまられました。わたくしどもは、これは大へんだと思ひました。剛毅な先生がこれほどの苦痛の狀を表面にあら

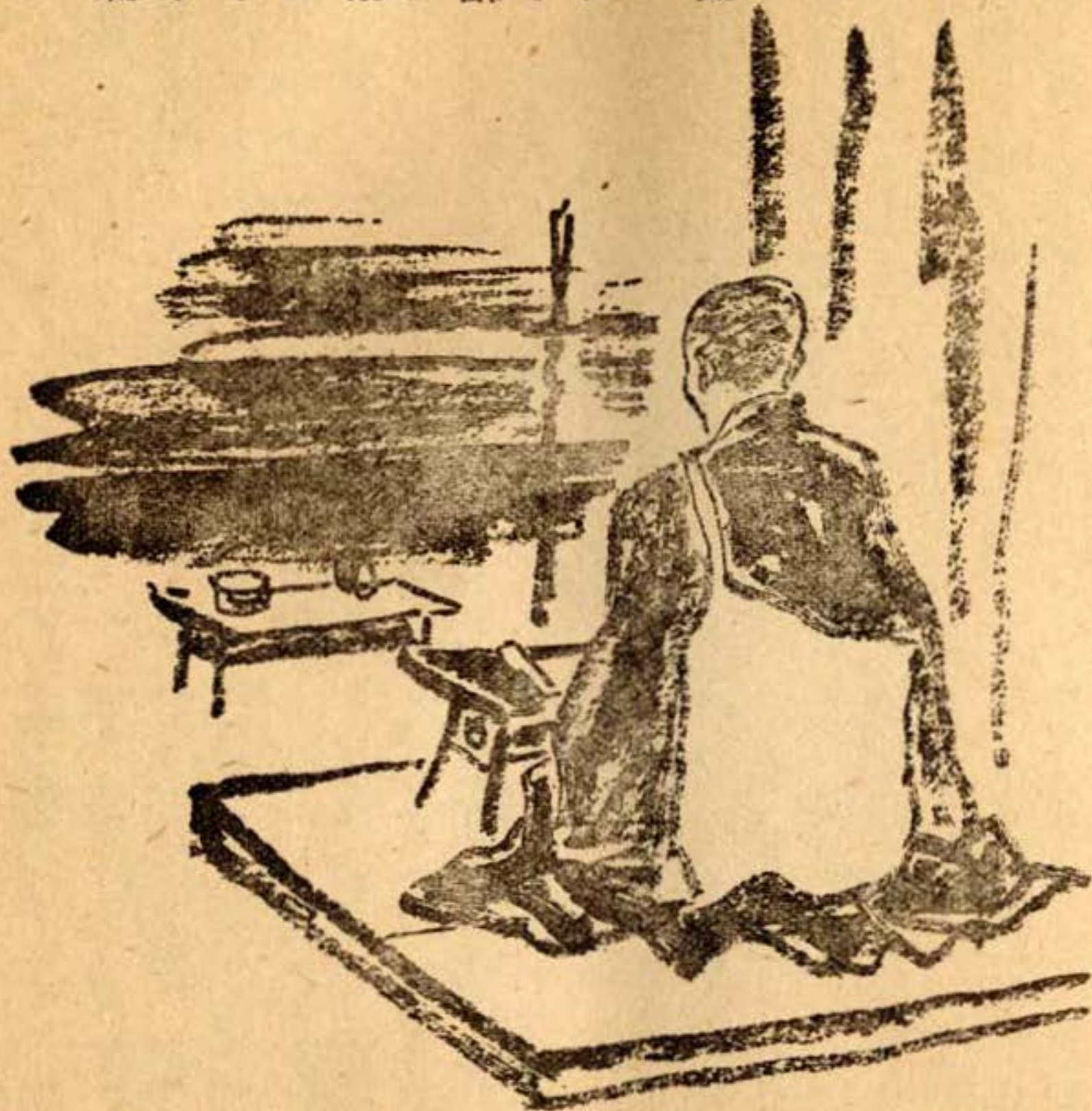
は、のは餘程のことであらねばなりません。だが先生は、嚴かに新正の大儀を修了されると、更に教員一同とともに、圖書室において屠蘇の儀を行はれ、了つて自動車で自宅に歸られました。わたくしどもはそのうしろ姿を校門に見送つて、憂色にとざされたものでありましたが、その憂ひは悲しい哉つひに實現されて了ひました。それは渡邊先生と學校との最後のわかれとなつて了つたのです。その日の無理がもとなつて、先生はつひに不起の病床の人となりました。そして、全教員全生徒の熱烈なるねがひに反して、昭和八年一月廿六日、さらに巨大なるべかりし生涯に、急に終止符をうつてしまつたのでありました。

二

わたくしどもは、後になつて承つたのであるが、その日先生は、例年のならはしのごとく、早朝四時半に病床よりおきられ、先づ身を潔め、法服に威儀をたゞして、佛前に修正會を嚴修することおよそ二時間に及んだといふことでありました。火の氣ひとつない西光寺の本堂には、嚴冬の鬼氣がたゞよつてゐました。その中に海旭大和尚の讀經の聲は淋漓として轟

ます。また、その思想からいへば、極めて進歩的な方でありました。その一例としては、社会事業といふ言葉の創唱者が先生であつたことなども思ひ出されます。

渡邊先生たちが社会事業といふ言葉を用ひはじめられた頃は、まだ世間では、相当物の分つたといはれる人々の間でも、社会事業、社会政策、社会主義などといふ言葉の區別は、判然とは分つてゐなかつた時分でありまして、内務省あたりでは、社会事業といふ言葉をきらつて、慈善事業または



感化救済事業などと言つてゐたのでありますが、渡邊先生を中心とする人々の間では、あくまでも社会事業といふ言葉で押し通して、

やがて内務省その他でも、この用語に追従することとなつたといふことです。

そのほか、渡邊先生の進歩的なことは、音楽や演劇や映画や運動などに對する理解に於ても現れてゐました。今ではスキーといへば、随分大衆的になつてきてゐるが、いまから十數年前には、まだ極く少數の人が試みるにすぎなかつたものです。その頃、先生はすでにスキーの話をよくわたくしどもにされたものであります。

「宗教家だとか教育家だとかいふものは、いつも人々より一步先んじて學んでおかねばなりません。」わたくしは幾度も、先生にさう言ひきかされたことを覚えてをり

酒はのまぬに越したことはないが、それが出来ないものは、せめて節酒して、酒にのまれぬやうにして貰ひたい。要は、佛教精神を昂揚して、精神生活を健全にするにあるのだと考へてをられたのだと私には思はれます。

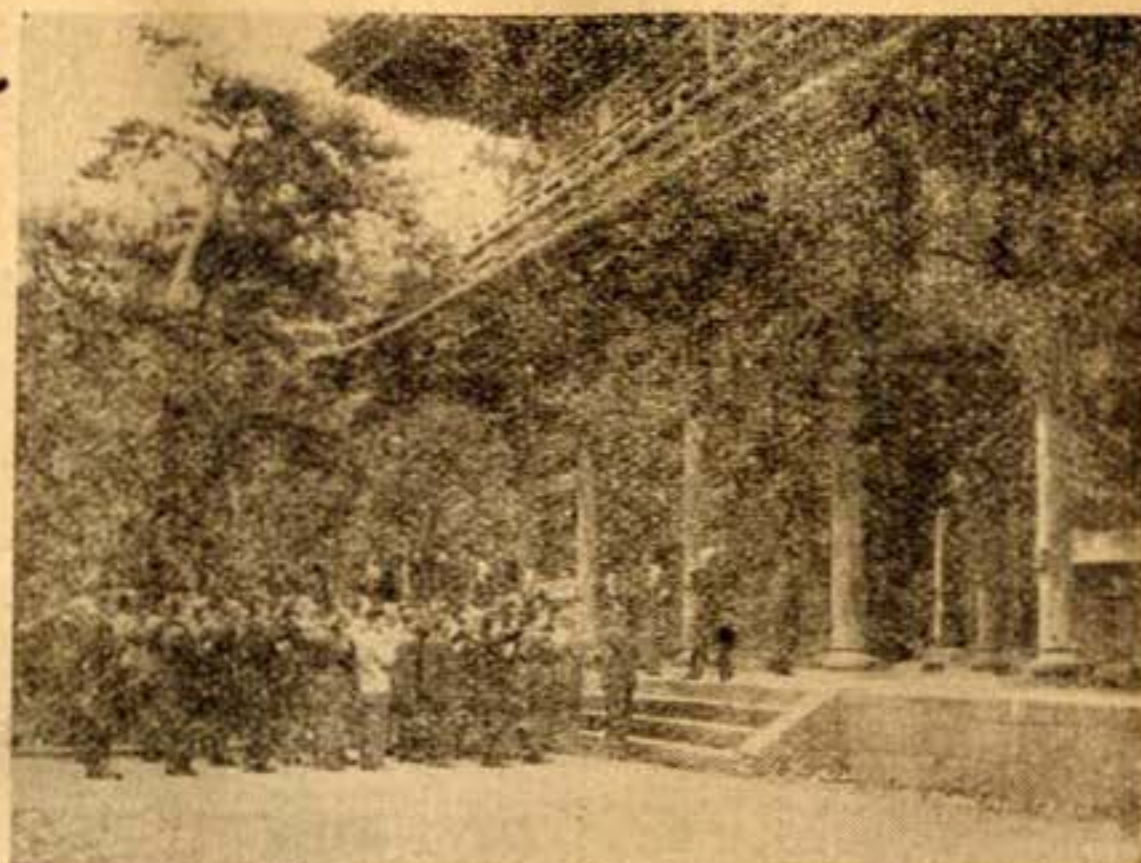
従つて渡邊先生は、それら杓子定規式なことよりも、むしろ法儀を厳にし、儀禮を整へることに力を入れたのであります。現代の佛教は先づ威儀をたゞすことから再出發すべきだ。今日の佛僧は先づ

法儀を嚴肅にすることから着手すべきだと主張せられてをられました。

それを主張するとともに、先生みづから身をもつてその範を垂れてをられました。先生が類のないほどに禮節に正しかつたのもそれ



でありました。先生の勤行が實に立派であられたのも



第一回 宗侶 指導者鍊成道場

鎌倉 光明寺で開設

かりが時々聞へた。

その昔、相模太郎時宗がこの由比ヶ濱にあ

つて、怒髪天をつき兩眼つりあげ元の使者を

兩斷したと云ふ名所をすぐ前にして古い傳統

を誇る鎌倉光明寺は三祖記主禪師の開山にか

り、淨土宗でも由緒の深い巨刹である。こ

の光明寺に十一月一日から五日間に亘る第一

回淨土宗々侶指導者鍊成道場が開かれてゐ

た。今鳴った太鼓を合圖に同寺開山堂では一

百の若い宗侶たちがとび起きたところであつ

た。この道場の期間こそ短いがその目的が戦

時體制下の指導者を鍊成するといふのである

から、役員も入場者も何ものかを必ずつかも

りとする眞剣さが溢れてゐた。役員は本會々

長里見達雄師の總指揮の下に夫れ／＼一流の

人士が網羅され、入場者は全國から選抜され
て集つた中堅宗侶百名であつた。

北は北海道、南は九州から馳せ参じたこれ

ら入場

實 話 だ べ ん 三 題



或る日の祖父母

ひ ろ み 生

人一倍祖父母に手がけられたせいでもあらうが、私は親と祖父母とケジメのつかぬくらいに祖父母が好きであつた。だから私が小学校に通ふ時分から暑中休暇の幾日かを必ず祖父母のもとで暮した。その習慣が青年時代になつても、妻をもち子供が出来てからも續いて、毎夏一週間か十日位は遊びにゆかねば気がすまないことになつてゐた。祖父母の住む家からは知多灣が一望の内に眺められ、その部屋々々にはいつも海の風が吹きこんで私達にとつてまさに絶好の遊び場であつた。

ある夏のことに長男をつれて汽車から降りる

と、出迎へに来てゐた祖母が、私

やうやく他の家ならこれから夕餉の仕度を始めるといふ時分には、もう勝手の方から

「ヤイ廣ヤ、ヒロロー」とドラ聲で私を呼ぶ

祖父の聲が聞える。祖母と顔見合せてクスリ

と笑つて座り直すところへ「われビールの方

がよからう、俺はこれに限る」と熱かんの酒

をコップを片手に持つて出て来る。祖父が獨

酌でぐい／＼飲んでゐる内に祖母は鹽をむし

つては子供の口にはこんでゐる。こうしてや

つと子供の夕食がすんだ頃には奥からおりん

の音と一緒に祖父の勤行の聲がもれて来る。

</

帯を小さくたれ結んだ祖母の後姿が妙に氣の毒に見へる。

長い勤行がすんで皆一語に縁先に出る。空も、山も、海も夕焼けで眞赤だ。近所から

「お土産を有難うさん」と禮に來る。わずかに二つ三つの菓子禮である。「アー明日もいゝ大氣だぞ」と納屋の方から祖父の聲がする。

こうした幾日かをのび／＼として暮し、陽焦けした顔で歸途につく私は、煩雜な交際と打算的な商賣しかない都會へと汽車に乗る。そして「サーまたやるかな」とつぶやく。

その祖父母も三年前のこと前後して死んでしまつた。私の長男も四歳で幼稚園に通ひ始めて間もなく死んだ。そんな時また／＼生後まもない長女が死んだ。永い病床生活をやつてゐる私はこう考へざるを得なかつた。一生を素直に信仰に捧げて逝つた祖父母は本當に人生に満足してゐたに違ひない。一倍可愛がられて世の淨穢を



洋行歸り

吉 水 生

ペルリで名高い久里濱よりも、もつと南にあたる私の村に三人の洋行歸りが住んでゐる。もつともこの洋行歸りは外遊や留學のそれではないが、さすが黒船を最初に見た人達の血をひくだけあつて何れも時代がかつた人達であるに拘らず、今もつて洋行歸りの愛稱で呼ばれ、私達村人から云ひ知れぬ親しみを持たれてゐるから面白い。

この三人の内では一番若い良作爺さんは、今では「ふじ園」といふ銘茶を商ふお茶屋さん主人である。明治の末葉のこと、未だ血氣盛んな良作さんは海外發展の壮志を抱いて着々實行に移つた。良作さんはアメリカに渡つて苦學をしながら偉い人になるつもりであつたので、先づ英語の勉強を始めた。さすがに

★ 2602 ★
★ ボクの 計画 ★
★ わたしの 計画 ★
漫 画 協 團

共同炊事

山崎善一

太った奥さん
「共同炊事も良いけど
私だけ餘計貰ふ
やうに見へて
困るワ」



私場の合

① 私、今年から徒歩通學よ



② 勿論、それは體

お店を閉つてから
「お前どうも頭の下げ方が足らんぞ
後の勝どんを見習へ」

新商道演習

をき原賢次



賢次

久 口 川

若い人は

④ ダンスも たへて	① 今年まづ らダンス 禁酒
⑤ それ から	② 次にダ 禁煙
⑥ お嫁さん 貰ひます ダンス	③ 貯金 はダン ゼンし ますわい

禁煙

山崎 善一

今年から断然
禁煙した主人
「オイマスク
持つて来い」
「ハイ只今」



ZEN



續

小庵にて

子 母 澤 寛

秋のはじめの頃だけを、ここで過そうと考へてゐた私達老夫婦は、ずゐぶん長い間、鶴沼の小庵に暮して終つた。十二月になつても、まだ東京へ引揚げきりには出来ない程の愛著を感じてゐる。

子供達を東京の家へ離して置いて、そんなに心配ではないといふやうなこともあるが、こうした世の中のさわがしさから離れた静かな佗しい生活が、もう、自分達にびつたり合ふやうな年齢になつたのであらう。二三年前までは、二三日もすると直ぐに東京が戀しくなつては出かけて行つたし、夏休みの中で、東京を見ずには辛抱出来なかつたものである。それを、娘たちも伴たちもゐない小庵に、私達二人がちつとこうして松風の音をきいたり、浪の遠鳴りをきいたりしてゐるのは、考へて見れば、不思議なやうな氣さへする。老妻は、私が少しばかりの勉強をしてゐる間には、よく片瀬へ行つたり、藤澤へ行つたり、電車で買物にあるいて、如何にもそれが楽しそりでもあるし



中村辨康師著の

「日常勤行式講讀」刊行さる

かつて本誌に連載され、好評を
拍した中村辨康師の「日常勤行式」
の刊行は各方面から多大の期待を

かけられ、印刷を急いでゐたところ
やうやく出来て發刊されまし
た。これまで多數の豫約申込みが



よく御隆盛ならんことを

莊原 阿部千代畫



法 語
解 說

選んで正しきを攝る

選擇集第十六章より

中 村 辨 康

(法 語)

はかりおもみれば、それ速かに生死を離れんとほつせば、二種の勝法の中には、しばらく聖道門を開きて、選んで淨土門に入れ。淨土門にいらんとほつせば、正雜二行の中に、しばらく、もろ／＼の雜行を抛ちて、選んで正行に歸すべし。正行を修せんとほつせば、正助二業の中には、猶ほ助業を傍らにして、選んで正定をもはらにすべし。正定の業とは、すなはち、是れ佛名を稱するなり。名を稱すれば、必ず生ずることを得。ほとけの本願に依るがゆへなり。

選擇本願念佛集第十六章 法語抄一〇

(解 說)

私達が何故に宗教を求めるかと云へば、人間生活の眞意義に目醒めたいからであります。所有觀念の中にのみ離脱して居て、本當に「よくぞ生れ來し」と云ふ人間としての喜びも知らず、俗諺にも「慾の爲には頭のはちのわれるのも知らない」と云はれるほどの私利生活に追ひ使はれて居る。此の現狀を眺める時、是れでは全くわれながらなつて居ないと痛感せずには居られません。

よく／＼考へれば私達は貫い一生を棒にぶつて居るものです。結局成敗損得毀譽褒貶等の八風に左右されて、浮いたり沈んだり死んだり生きたりの謂ゆる生死の大海の中に流れ流されて居るのであります。ですから今までのやうな誤まつた考へを訂正しようとする爲めに新體制の實施に遇へば、何うでせう。いろ／＼な苦情や不平ばかりならべて

